

学校週五日制と生涯学習

渡辺安男

- I 学校教育の役割の限界
- II 生涯学習の場としての学校
—学校週五日制の「受け皿」として—
- III 家庭・地域社会への働きかけ
- IV 家庭の教育機能を高める
- V 子どものための地域環境づくり
- VI 地域社会を開く
- VII 地域での実践研究が要求された実験研究校

平成7年度の公開講座「学校週五日制と生涯学習」で講義した概要の一部分を以下に示しておく。

I 学校教育の役割の限界

これまでの静的な社会においては、学校教育において知識や技術を頭に詰め込み詰め込みと、満杯になるまで詰め込まれ、後はその詰め込まれた知識や技術を小出しに吐き出していけば、何とか晩年までこの世を無事に過ごせるだろうと、世の親たちは考えていた。

ところが、産業化・工業化・都市化・核家族化・国際化などの「Zation現象」が急激に進展し、動的な社会に移行するにつれて、これまで得た知識・技術などはすぐに陳腐化し、役に立たなくなってしまった。人間としていかに生きるかなど哲学的なこと、道徳的なことは、やはりいつの世にも必要であり、放り出してはいけませんが、学校で得たそれ以外の知識・技術などは役立たなくなってしまった。

私たちは学校を卒業してからも、たえず知識・技術などを充電し続け、必要に応じて放電するというように、充電—放電の生活、言い換えればinput—outputの生活が重視されるようになってきた。つまり、生涯にわたって学習するというように生涯学習社会が到来してきたのである。

生涯学習はLifelong Learningとか、生涯教育はLifelong Educationとかいわれているが、Lifelong integrated LearningとかLifelong integrated Educationというように、間にintegrated（統合された）という概念が入ってくるということが重要なのである。

なお、生涯学習という概念は学習者を主体に考える場合、生涯教育という概念は教育者に主体をおいた場合に使用される。

Integration（統合）は、人生の垂直的なタテの系列と人生の水平的なヨコの系列それぞれの統合とお互いの統合が含まれると同時に、家庭教育・学校教育・社会教育の統合をも指し示している。ここでは、学校と家庭・地域社会の連携・協力ということで、後者の立場からみていこうと思う。

II 生涯学習の場としての学校

—学校週五日制の「受け皿」として—

学校週五日制の「受け皿」づくりとして、「開かれた学校」とか家庭や地域社会の「連携・協力」とかがいわれ、生涯学習の場として学校の役割に期待する動きもみられた¹⁾。学校の主要な役割をみると、次のとおりである。

- (1) 地域の拠点として学校に情報提供機能が求められてきた。
- (2) 体育館や校庭だけでなく、特別教室や一般教室・余裕教室などの学校施設の地域へのいっそうの開放が求められてきた。
- (3) 地域における活動の協力と地域の教育資源の活用が求められてきた。青少年の地域における活動に対する協力を学校に期待している。
- (4) 子どもたちに自らの学習や生活を自主的・主体的に設計する課題意識や手立ての育成が求められている。
- (5) 新たに生まれた休業日の意味づけや価値観の創造が求められている。また、ボランティア活動に対する参加の機会の促進や意識の啓発を図っていくことが必要である。

III 家庭・地域社会への働きかけ

家庭や地域社会もまた学校と同様に子どもの教育の場であり、学校週5日制の推進に大きな役割を果たしている。週2日の休業日が設けられることによって子どもが家庭や地域社会で生活する時間は増加するが、家庭や地域社会の教育機能が発揮されてはじめて、子どもの健やかな人間形成が図られるのである。

これまで家庭や地域社会がもつ教育機能が十分に発揮されていないとの指摘が多くなされている。学校中心の教育観、学校第一主義の教育観が強いうえに、パートタイムなどで就労する母親が増加したり、核家族化が進行したり、子どもたちが地域社会で遊ばなくなったり、種々の理由で家庭や地域社会の教育機能が低下し、家庭で行われなければならない基本的な生活習慣さえも教えられていないという指摘である。

子どもは、学校・家庭・地域社会で育つものである。学校週5日制の実施にあたって、学校中心の教育観を改め、学校・家庭・地域社会が各々の教育機能を十分に発揮して、そのうえで相互に連携して子どもの健やかな人間形成を図るようにしたいものである。そのためには、やはり学校が積極的に家庭や地域社会に働きかけ、学校週5日制への理解と協力を求めなければならないといえる。

IV 家庭の教育機能を高める

家庭は、親と子どものかかわりやふれあいをとおして子どもの人間形成を培う基本的な場である。その基本的な場としての家庭で、親子のふれあいが喪失し教育機能が低下してしまったのでは、子どもがよくなるはずはない。

親は子どもの健やかな成長を願い、よりよく生き、自己変革していく子どもの育成をめざし、家庭の教育機能が十分に発揮できるよう最大の努力をしなければならない。毎日の家庭教育はもちろん、2日間の休業日にできるだけ多くの子どもとともにする時間を持ち、親子のコミュニケーションを深めるとともに、子どもにさまざまな体験をさせ、かつ人間として生きていくために必要な基本的な生活習慣の定着を図らせるよう努力することである。

学校週5日制は、親が子どもの教育についての自覚と責任を改めて考え直す絶好の機会である。学校は積極的に各家庭に働きかけ、家庭の教育機能を高めるように理解と協力を求めることが必要といえる。

V 子どものための地域環境づくり

学校週5日制は、子どもが学校外教育に参加するための有効な制度といえる。その有効性の主要なものをあげると次のとおりである。

第一は、自然や社会とのかかわりのなかで、さまざまな生活体験ができることである。学校生活や塾通いなどで多忙な生活を過ごしている子どもたちであるが、学校週5日制の実施によって2日間連続した休業日がとれ、時間的に余裕が生じ、生活を楽しんだりさまざまな生活体験をしたりすることができる。

公園や遊園地、さらに地域の自然とふれあいができるとともに、異年齢の子どもとの遊び、多くの地域の人々との接触、児童館・図書館・博物館などの公共機関の利用は、子どもの自主性や感性、社会性などを培うためにきわめて重要な役割を果たす。

第2は、ボランティア活動への参加ができることである。子どもたちは、ややもすると自己中心的、打算的な生活を過ごしやすいが、2日間続く休業日を利用して地域や団体のボランティア活動に参加することができる。地域や団体のボランティア活動としては、環境美化、福祉施設などの訪問など、さまざまな活動が行われているが、子どもたちは自己自身の発達段階に応じ、震災からの復興などのボランティア活動を選択し、参加することができるわけである。ボランティアに参加した子どもたちは、自らの自主性を確立するとともに、人間尊重の精神を身につけ、豊かな心を培うことができるようになる。

学校は、学校週5日制のこうしたメリットを地域の人々に訴え、子どもたちが生活体験やボランティア活動がしやすいよう、その受け入れ体制を整えてもらうことを地域に強く働きかけることが大切である。休業日における地域での子どもの活動基盤の拡大・強化を図ることや、自由に選択できる多様な場や機会の充実を図るように働きかけ、実践してもらうのである。学校だけが一生懸命になるのではなく、家庭と地域が一体となって実践することによって学校週5日制はその目的が達成されることを念頭におき、地域への働きかけを強めたいものである。

VI 地域社会を開く

学校週5日制で、子どもは「地域」を身近な活動の場とする。公園や遊園地で自然とのふれあいや異年齢集団との遊び、児童館・図書館・博物館・体育館などの公共施設の利用、青少年団体活動やボランティア活動への参加、地域の人々との交流等によって、子どもは自立性や社会性、感性などを培っていく。そのために休業日における地域での体験の機会や場（学校外活動）の拡大を積極的に行い、子どもを指導していく、それが「地域を開く」ことである²⁾。学校・家庭・地域社会の三者が「われ関せず」や、責任のなすりあいではなく、父母と教員と地域社会の人々の心の交流を広げ、これまでの教育を省みて、これからは三者が汗を流し、新しい手作りの教育を始める。そういう気持ちで一つひとつ実践を積み重ねていけば、「子どものための週5日制」が実施されるものと確信している。

VII 地域での実践研究が要求された実験研究校

香川県塩江町においては、平成5年9月から地域研究指定を受け、月2回の土曜休業日の実践研究にとりくんでいるが、地域実践研究は従来の学校単独の研究に加えて、地域での実践研究が要求されている。そこで、次のようなことが念頭におかれ、研究に着手してきた。(1)将来的な展望に立った生涯学習社会の構築、(2)学校運営の抜本的見直し、(3)新しい学力観に立脚した児童・生徒の学力の向上、(4)地域社会と学校との連携、および地域・家庭の教育力の回復。

そして、以下のようなことが計画され、実施された。

1. 全町教育の場構想

(1) ウォッチングの資料づくり

- 1 学習ガイド、2 自然観察用図鑑等の購入

(2) 説明板設置

2. 教室・講座等の開設

(1) 教育委員会としての教室の開設

- 1 星空の観察、2 バードウォッチング、3 昆虫ウォッチング、4 植物ウォッチング、
5 川のウォッチング

(2) 美術館での教室

- 1 こども陶芸教室、2 針穴写真教室、3 絵画教室、

(3) 体育的教室・行事

- 1 サッカー教室、2 マラソン大会

3. 地域の連帯意識の高揚、地域の教育力の高揚

(1) 町に伝わる伝統的行事への参加

(2) 花一杯運動への参加

「ウォッチング」を中心に「地域社会重視型」の学校週5日制が実施されているが、この町の学校週5日制の今後の課題をあげると、次のとおりである。

- 1 生涯学習の理念に立った地域学習（ウォッチング等）の工夫につとめる。
- 2 学校における教育課程の創意工夫とそれに伴う授業改善の研究をする。
- 3 休日子どもが自主的に計画・実践できるよう家庭・地域・学校の連携をより深め、豊かな心、高い文化の町づくりをめざした地域の教育力の向上に努める。
- 4 学校週5日制の趣旨を家庭・地域・学校に広め、地域ぐるみの推進体制を整える。
- 5 今後も学校週5日制に関する実態調査を行い、その推移を把握し、課題解決のためのデータとして活用する。

学校週5日制の導入は、今日の教育課題解決の観点から積極的に推進すべきである。したがって、学校週5日制の導入は、子どもの望ましい人間形成を図る観点から、学校および地域社会の教育全体のあり方を見直す契機としてとらえ、それぞれの教育力の充実をはかるとともに、今日の教育のあり方を学校教育偏重から家庭や地域社会での教育への比重を高める必要がある。

そのためには、生涯学習の理念に立った学校週5日制の推進と充実を図りながら、今後とも引き続き、残された課題の解決に向かって取り組んでいかなければならない。

「学校週5日制」そのものは、いまの学校とのバランスをよくして子育てにかかわっていかうというものであるから、むしろ反対するものではない。しかし、日本の場合には、純粹に子どもの立場に立ち教育的に配慮されて導入・実施されたのではなく、政策的に判断されたところに問題の根深さがある。反対ばかりしてはことは進まないの、これを「教育制度改革」や「地域活動活性化」の好機としてとらえ³⁾、とくに子どもたちの地域活動の再生に振り向けていく必要がある。

注

- 1) 西村文男・天笠茂・堀井啓幸編『学校五日制の実践的展開－教育課程の編成と学校経営』教育出版、1992年。

- 2) 亀井浩明・尾木和英・小川友次編著『[学校五日制] が実施されて』学陽書房、1993年。
- 3) 日本社会教育学会編『週休二日制・学校週五日制と社会教育』（日本の社会教育・第37集）東洋館出版社、1993年。

